第　40　号

県中教研
国語部会だより

発 行 日　令和7年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　二俣　紀子
題　　字　金山　泰仁　先生

育成を目指す資質・能力にふさわしい言語活動を

主任指導主事　上田智代子

授業の中で、生徒の目が輝き、思考がくるくる動き始める瞬間に立ち会うと、心が弾みます。

そんな印象深い授業との出会いが今年度もありました。考えたくなる課題、個で考える時間の保障、対話の場の工夫等、教師の様々な手立てが功を奏し、生徒一人一人が自分の考えをもっています。だからこそ、伝えたいし他の人の考えも知りたいという、対話の必要感が生まれている授業です。生徒は、言葉や表現がどのような効果を上げているかを伝え合う中で、自分の解釈の妥当性に立ち返ったり、互いの感じ方や学び方の違いを発見したりしていました。振り返りでは、「自分は表現技巧に注目していたが、対比や作者の立場という視点から言葉の意味を考えている人の話を聞いて、読みが広がった。次の時間はその視点も生かして考えたい」など、自分の学びを振り返り、自己調整しながら、身に付けたい資質・能力を獲得していく様子がみられました。

学校を回る中で、研究主題「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語の資質・能力を育てる指導と評価はどうあればよいか。－身に付けさせたい資質・能力を明確化した授業づくりと指導に生かす評価－」に基づいて、先生方が研修と授業改善を日々進めてこられた成果が、生徒の姿に表れてきたと感じています。

国語科では、言語活動を通して、資質・能力を育成します。生徒が言語活動に取り組んでいる際に、その単元で育成を目指す資質・能力の状況を教師が見取り、個々の生徒に必要な手立てを講じて、学習活動の質を高めていくことが大切です。

目の前の生徒の実態に応じて、目標とする資質・能力にふさわしい言語活動を工夫し、楽しく、そして力の付く授業を目指し続けたいものです。

（西部教育事務所）

指導と評価

部長　二俣　紀子

今年度から「言葉による見方･考え方を働かせ、言語活動を通して、国語の資質・能力を育てる指導と評価はどうあればよいか」を研究主題とし、「身に付けさせたい資質・能力を明確化した授業づくりと指導に生かす評価」を中心に研究を進めてきました。

第68回研究大会で提案された「書くこと」の実践では、考えの論理構造を整理するための「ピラミッドストラクチャー」や思考を整理し発想を豊かにするための「マッピング」等の手立てが講じられた授業が展開されていました。また、ICTの活用も多くみられ、生徒が、必要な情報を収集したり､主体的に友と対話したりするだけでなく、評価を蓄積するためにも活用されていました。さらに、学習形態を自ら選択し、自分に合った学習方法で自己調整しながら、課題を追究する姿もありました。いずれも明確なねらいの下、言語活動が設定され、ICT等を有効に活用した授業づくりが実践されていました。

また、今年度から「指導と評価」について研究を深めるに当たり、授業力向上アドバイザーである富山大学名誉教授米田猛先生に、新川・砺波の２地区において、「国語科における『主体的に学習に取り組む態度』を考える」と題してご講話をいただきました。米田先生は、どのような「主体的」な姿を、どう育成するかについて、４つの具体的な方法を提案され、実践の中で、生徒の変容を捉えながら「主体的に学習に取り組む態度」の評価について考えていく必要があることを教示されました。

「評価」は一朝一夕にできるものではありません。実践を積み重ねていくことが大切です。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、指導と評価を相互に関連付けながら学習指導していくことで、国語の資質・能力を育成していけるよう、研究を推進していきたいと思います。

（高・志貴野中）

第 68 回　研 究

新　川　地　区　（滑・滑川中）

（1）研究授業

小田凜乃教諭が第２学年で向田邦子「字のない葉書」を題材に、「『字のない葉書』を読んで、父親に対する筆者の思いについて語り合おう」という単元の授業を提案した。

本時のねらいは、本文の叙述を基に父親の言動から父親の人柄や心情を読み取ることであった。生徒は、前時までに父親が「愛情深い人物」だと読み取っており、本時ではこのような人柄が読み取れる叙述を見付け、それに対する自分の考えを、指定された文章の形に添ってまとめることができた。また、手書きか入力か、話し合いながら考えるか、個でじっくり考えるかなど、生徒一人一人に学習形態を選択させることが、意欲的に学習に取り組むこと、自己調整をしながら学ぶことに有効であった。

（2）研究協議

グループ別協議では、「生徒の様々な習熟度に合わせた授業の在り方」や「読み取ったことを表現する力をどのように育成するか」などの視点から意見が出された。

（3）指導助言

米田歩主任指導主事（東部教育事務所）からは、研究授業について、「全ての生徒が学習課題と向き合えるように、実態に応じたスモールステップの手立てがあったことが効果的であった。ゴールとなる生徒の姿を思い描き、どうすればそこにたどりつけるかを考えていくことが必要である。交流活動を通して、一つの叙述でも生徒によって捉え方が違うことに生徒自身が気付くことが深い学びにつながっていく」などの指導助言をいただいた。

平野　那穂（魚・西部中）

富　山　地　区　（富・南部中）

（1）研究授業

増田哲郎教諭が第２学年で「『徒然草』を読んで、筆者の考え方に対する意見文を書こう」という単元の授業を提案した。「家の作りやうは」（第五十五段）を読み、兼好法師の考え方に対して、根拠の適切さを考えて説明や具体例を加え、自分の考えが伝わるような文章を書くことをねらいとした。生徒が意見文を書きやすいように型が示されたワークシートが効果的であった。また、古典に表れたものの見方や考え方を身近な現代の生活と結び付けることで、新たな発見をしたり興味・関心を高めたりするなど、古典を学ぶ意欲につながる授業であった。

長島陽葉教諭が第３学年で「根拠や文章の構成、表現等を工夫し、説得力のある批評文を書こう」という単元の授業を提案した。より説得力のある批評文に仕上げるために、「観点」を明確にして下書きを読み合い、助言し合う学習活動を取り入れ、生徒が相互に評価し合うことのできる授業であった。一人一台端末を活用しながら、主体的に対話を重ね、自分の考えがより伝わるような批評文に仕上げようとする生徒の姿が印象的であった。

（2）指導助言

中川伊通子指導主事（東部教育事務所）からは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、言語活動の工夫や、生徒自身が学びや変容を自覚できる場としての振り返りの重要性について助言をいただいた。

また、小櫻昌子指導主事（東部教育事務所）からは、生徒の実態を踏まえて指導事項を焦点化することや「個別最適な学び」と「協働的な学び」を効果的に組み合わせた単元構想の在り方について助言をいただいた。

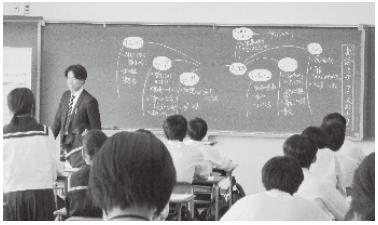
柴　　千春（富・楡原中）

大会を終えて

高　岡　地　区　（高・高陵中）

（1）研究授業

境康希教諭が第３学年で「登場人物の考え方や行動を批判的に読み､作品を批評しよう－『故郷』－」という単元の授業を提案した。学習課題「『故郷』の価値に迫るために『批評のテーマ』を設定する」の下、生徒たちは疑問に感じたことや興味をもったことについて、一人一人が意見をもって授業に臨み、自分の言葉で考えを述べ、ペアや全体で共有した。その後、教師が板書したマッピングを見ながら、自分が追究する個人のテーマを決定した。また、批評文のモデルや観点等、ゴールの姿等を示したことは、生徒が見通しをもって活動することに有効であった。



（2）研究協議

グループ協議では、「批評」という言葉を正しく捉える難しさが話題になった。また、生徒が考えた「批評のテーマ」には、作品を俯瞰して捉えようとするものから、文章の読み取りで解決できそうなものまでと､内容に差があったため､「よさ」や「魅力」､「主題は何か」など、テーマを絞るなどして書かせる方法もあったのではないかという意見が出された。

（3）指導助言

上田智代子主任指導主事（西部教育事務所）からは、「今回の授業が、テーマを決めるよいきっかけとなったこと」を評価していただいた。また、生徒の課題意識を高めることについて、「言語活動を行う際には､生徒にとって『取り組みやすい』『興味がある』ということだけでなく、生徒が活動の必要性を実感できるような手立てを講じる必要がある」などの指導助言をいただいた。

米田　香麗（氷・西條中）

砺　波　地　区　（砺・庄川中）

（1）研究授業

東美紀教諭が第２学年で「根拠の適切さを考えて書こう－意見文を書く－」という単元の授業を行った。「ピラミッドストラクチャー」という思考ツールを活用することによって、生徒の思考、論理構造が可視化された。考えと事実という二つの情報と、その間をつなぐ「解釈」を分けて考えさせたいというねらいを達成するために効果的な手法であった。また、学び方の方針が明示されており、本時はどの方法で学習を進めるか、目的別に選択できるようになっていた。生徒は、学習方法を自己決定する場が与えられたことにより、他者参照や自己調整をしながら、見通しをもって活動していた。その際、学習方法の選択に迷っている生徒に対して、教師が的確なアドバイスを行う場面がいくつもみられた。教師が活動中の生徒のつぶやきを広げたり、やりとりを聞かせたりする技術を更に磨き、教室全体の生徒の思考を止めないようにしていくことも重要である。

（2）指導助言

大道正敬指導主事（西部教育事務所）からは、主に「研究主題との関連」や「身に付けさせたい資質・能力を明確化した評価の工夫」について指導助言をいただいた。本時においては、

- 「書くこと」の指導事項が明確になっており、終末の活動ともつながっていた。
- 思考ツールの活用が適切であった。生徒は思考する価値を体感できていた。
- 完成させた意見文を発表する場を広げることも考えられる。その際､「誰に対して､何のために」という目的を明確にすれば、更に生徒の資質・能力の育成につながるだろう。

などの助言をいただいた。

八下田道子（小・蟹谷中）

魚津市中教研

「自己調整を促す効果的な言語活動と ICT機器の活用」

魚津市では、授業者がデジタル教科書やパワーポイント等のICT機器を使うだけでなく、生徒が一人一台端末を使って自分の考えを表現したり、他者と意見を共有したりすることで、生徒の自己調整を促すことができるよう、実践事例の持ち寄りや互見授業を行った。

入力シートを用いて個人の意見を全体で共有する、生成AIを用いて生徒の意見と比較するといった活動を通してICT機器の活用場面を探ってきた。効率よく多様な意見に触れられるので、生徒の深い学びにつながる場面が多くみられた。一方で、従来の全体発表では、生徒の意見を出しながら整理することができるが、ICT機器を使うと情報量が多くなるため、共有するだけではなく、分類してまとめる活動等を設定していく必要があった。また、自己調整を促すには振り返りの質が問われる。何をどのように学び、どのような変容があったのかを考えることで、生徒自身が手応えを感じられるような時間の確保が必要である。

また、振り返ったことを他者と共有することでその手応えがより大きなものとなる。学びの跡を蓄積するという面でもICT機器の活用は必要であり、使うことを目的とせず、更なる研究をしていきたい。

平野　那穂（魚・西部中）

富山市中教研

「学習指導と学習評価の在り方 ～『指導と評価の一体化』を的確に、柔軟に、継続して～」

富山市国語部会では、「指導と評価の一体化」を目指し、指導事項と評価規準との関連、単元のどの場面でどのように評価するのかを明確にした授業づくりについて、研修を行った。

特に、６月部会では、兵庫教育大学大学院学校教育研究科　吉川芳則教授を講師として招聘し、「学習指導と学習評価の在り方～『指導と評価の一体化』を的確に、柔軟に、継続して～」と題された講演会を通して、評価の在り方について研修を深めた。「付けたい力と学習評価の方法は適したものになっているか」の見極めが大切であり、付けたい力を絞り込んで授業を計画し、それらに限定して評価していくといった授業づくりについて具体的に学ぶことができた。また、付けたい力（目標）に即した指導や学びがなされているか確認しないまま、「感覚や雰囲気で進める授業」に陥らないよう、年間指導計画に基づいた授業展開や評価の吟味の重要性についても、改めて考える機会となった。

学習課題が「教師の願い」になっており、生徒自身の目標になっていない授業がみられるという指摘を受け、生徒を主人公とした主体的な学びの実現についても、今後研究を重ねていくべき課題と考えている。

柴　　千春（富・楡原中）

氷見市中教研

「資質・能力を育てるための指導と 評価の在り方について」

十三中学校の引谷樹教諭が「和歌の世界を味わい、鑑賞文を書こう『君待つと－万葉・古今・新古今』」という単元で研究授業を行った。学習課題を、「自分が選んだ和歌の魅力を最大限に伝えよう。～必要な視点は何か～」と設定し、班で一つの和歌について調べた。その後、作品の魅力や工夫点についてグループに分かれて交流活動を行い、どのように考えれば魅力に迫ることができるのか、どのような視点を活用したらよいのかを共有した。「個人で考える段階」と「班で協力して学ぶ段階」の２段階を設けたことが、生徒の「相手の発表を聞きたい、自分の考えを伝えたい」という学習意欲へとつながっていた。また、授業の中で身に付けてほしい力や活用してほしい技能を明確に示し、指導事項を踏まえた単元構想をすることが、言葉による見方・考え方を働かせるために効果的だった。

課題として、交流後の学びの共有の仕方や、学習意欲を向上させるための評価の在り方が挙げられた。単元の学びをどこにどうつなげ、何を積み重ねていくのか、どのように評価していくことが適切かなどについて、研究を重ね改善を図っていきたい。

米田　香麗（氷・西條中）

小矢部市中教研

「構成を捉え、説明の工夫を考える」

５月に、津沢中学校の泉千英教諭が第２学年で研究授業を行った。富山県出身の昆虫学者沼田秀治氏によって書かれた報告文「クマゼミ増加の原因を探る」について、「文章と図表などを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈することができる。」（C（１）ウ）という単元目標を掲げて授業を展開した。本文について読み取ったことをペアやグループ内で説明する活動を設けたことで、自分の説明が適切かどうか、適宜聞き手の反応を見ながら確認することができていた。説明の際に、一人一台端末や電子黒板を使用したことで、思考が可視化された。ICTを「考える手段」の一つとして有効に活用したよい実践例であった。

授業後のグループ別協議会では、教科書内の各単元のポイント整理のための資料について意見交換がなされた。授業の導入で予めそのページを示してしまう場合と、文章の読みを通して生徒が考えたことをまとめた後に確認させる場合のどちらがよいかなど、悩みながら日々実践に取り組んでいることについて、忌憚のない意見交換の場となった。

八下田道子（小・蟹谷中）